

建築

一般的な「三十三間堂」という名前は地名的な呼称であり、建物の物理的な構成に由来している。その意味は単純に「柱と柱の間の空間が 33 ある寺」というものである。ここでも、宗教的な影響がはっきりと表れている。33 という数字は、すべてを見通し、すべてに対して慈悲を示す菩薩である観音菩薩が人々を救済へと導くために 33 の異なる姿になることができる、という大乘仏教の信仰に由来している。

しかし、外からじっくり観察すると、寺の側面に並ぶ太い木の柱と柱の間の「空間」の数は、実際には 33 ではなく 35 であるということに気づくだろう。このことを説明するのはとても簡単だ。実際、正式な数はこの建物の内部の部屋を基準にしており、周囲の廊下や軒は除外される。三十三間堂の本尊が祀られているのはこの内陣の中であり、その本尊の両側には、1000 体の菩薩と、さらに 30 体のインドの神の像が並んでいる。

三十三間堂の最初の建物が 1164 年に完成したときは、それははるかに大きな寺院・宮殿の複合施設の一部であり、鴨川と京都の東の丘（東山）の間の、七条通りに沿ったその敷地の広さは 14 ヘクタール、サッカー場 10 面に相当する面積に及んだ。後白河上皇は、自らの法皇としての地位を正当化するために、インドの仏教的な王という言葉を根拠とした新しい支配体制のための、政治的、経済的、そして宗教的な拠点として、この複合施設の建設を命じた。1249 年に火災によりこの複合施設は全焼したが、三十三間堂は間もなく再建された数少ない建物のひとつだった。その後 750 年間にわたって幾度かの大きな修復が行われてきたものの、今日も 1266 年に建てられた建物が、日本最古の建築物のひとつとしてそのままの姿で残っている。

長く、がっしりとしたシンメトリーの三十三間堂の角材の枠は、優雅に傾斜した瓦屋根と対照をなしている。半円筒形を連結したように見えるこのタイプの瓦は、平安時代（794～1180 年頃）に最も重要な寺院や宮殿の建築のみに使用された。連結した瓦でできた無数の柱の先端にかぶせられた円形のペンダント（軒の先端にあるもの）は、いくつかのモチーフで装飾されている。二重の蓮の花や、渦を巻く「おたまじゃくし」のデザイン、そして豊臣家の家紋などである。豊臣秀吉（1537～1598 年）は、16 世紀末の三十三間堂の部分改修に資金を提供した。その他のペンダント型の瓦には、慶安 3 年、すなわち 1650 年という刻印が刻まれている。この年はまた別の改修が行われた年である。大棟には大きな「鬼瓦」が飾られているが、これは悪霊を退散させるためのものである。

三十三間堂の瓦屋根の製造には非常にコストがかかり、またとても重量があった。この重さを支えるために、この建物は革新的な工学的手法を採用している。それは、梁、垂木、母屋

材の格子状の構造全体に均等に重量を分散するというものである。もともと、これらの木材の支えには、明るい青、赤、緑色の顔料でカラフルな装飾がほどこされていた。精巧な蓮の花や雲のパターンの痕跡は、今では室内の屋根裏の最も暗い部分にかろうじて見えるだけになっている。木材の連結構造により、三十三間堂は構造的に一定の柔軟性を持つことができ、これまで 800 年間、数多くの地震にも耐えることができた。

現在の寺の南側の境界になっている南大門と土塀は、どちらも豊臣秀吉の命令により 16 世紀末につくられた。敷地の北東の角の近くにある「東門」は、非常に特殊なデザインであり、同じようなものは日本全国でも数カ所にしかない。